



Passer montanus
Photo by Watanabe Yoshiro

参加型調査

キビタキの初認調査

～ 初認時期は昨年とほぼ同じ ～

高木 憲太郎

キビタキ調査へのご参加ありがとうございます。6月7日までに137名の方にご協力いただき、全部で221件の情報が集まりました。そのうち繁殖地の初認情報が67件あり、最も早いものは熊本での4月8日でした。

九州で4月上旬に初認された後、4月中旬には中四国から近畿、中部、関東にまで、数日の差で次々と繁殖地で初認されました。東北と北海道で初認されるのは少しずつ遅れて、それぞれ4月下旬と5月上旬でした。去年に引き続き、キビタキが徐々に北上していく様子をうまく捉えることができましたと思います(図1, 表)。

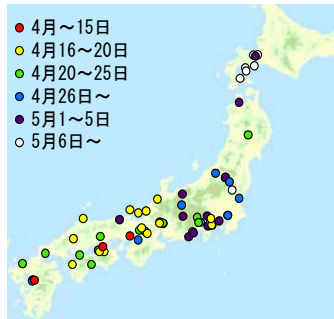


図1. 繁殖地での初認時期。

表. 地域ごとと日ごとの、繁殖地で初認された件数。日付青字が土曜日、赤字が日曜日と祝日を示す。

	九州	中四国	近畿	中部	関東	東北	北海道	総計
4月上旬								
4/08	1							1
4/13								
4/15			1					1
4/16			1	2	1			4
4/17			1	1	1			3
4/18			5	1	1			7
4/19			3					3
4/20				2	2			4
4月下旬								
4/21				1	1			2
4/23								
4/24				1	1			2
4/25			1	2	3	1	1	9
4/26				1	1			2
4/28					1	2		3
4/29					1	1		2
4/30					1	1		2
5月上旬								
5/01				3	1	1		5
5/02				1	2	1		4
5/04					1	1		2
5/05					1	2		3
5/09					1	1		2
5月中旬								
5/13					1			1
5/18							2	2
5月下旬								
5/21					1			1
6月上旬								
6/06							1	1
総計	4	14	8	17	12	5	7	67

暖かいところほど初認が早い

今年はキビタキの渡来時期に寒い日が続きました。初認情報を送っていただく際に、去年よりも早い、とコメントしてくれた方が、遅いとコメントしてくれた方よりも多かったのですが・・・、実際はどうだったのでしょうか？

昨年、気温と初認日に相関関係がみられるということをご報告いたしました。そこで、平均気温が5℃以上の日の、5℃との差を足し合わせた「暖かさの指数」というものを使って、昨年と今年の初認日の比較をしてみました。この指数は昨年使った寒さ指数の逆転のようなものです。簡単に言うと数字が大きいほど、1年間のうちにより暖かい日が多くあることを示しています。

暖かい場所ほど初認日が早い傾向が昨年と今年の2年で見られました(図2)。しかし、時期的にはほぼ重なってしまっています。回帰直線をえいっと引いてみると、若干2010年の方が初認日が遅かったのですが、やってみてはいませんが統計的な差はなさそうです。この2年では差がみられませんが、今後も調査を継続して、変化が見られた時は気候などとの関係を分析したいと思います。

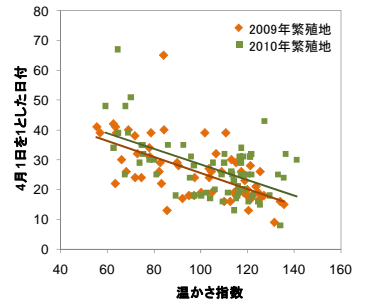


図2. 初認日の昨年と今年の比較。繁殖地の初認データのみを使用。

鳴き声vs目視 識別点の季節変化

この調査では、鳴き声で識別したのか、それとも姿を見て識別したのかを質問しています。そこで、どちらで識別したかと観察時期との関係を見ました。すると面白いことに渡来初期は目視観察が多く、後期になるとさえずりでの識別が増えてきます。渡来初期はあまりさえずらないとか、後期になると樹木の葉が開いて姿が見えにくくなるといったことが関係しているのかもしれませんが。

富士山でキビタキの調査をしています。葉が開いてからは姿を観察することが難しくなっています。

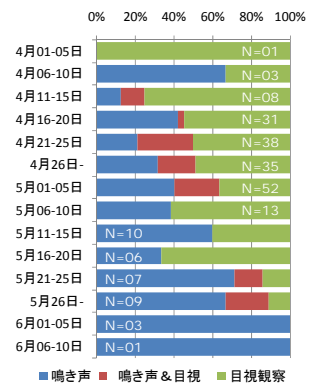


図3. 時期による識別方法の変化。全データを使用。

調査にご協力ください！

九州南部、山陰、東北、北海道の札幌以東の情報が手薄です。まだお送りになっていないキビタキの初認情報をお持ちの方がいましたら、ぜひ、お送りください。調査へのご協力をお願いします。

初認情報の送信は下記の速報ページの画面中段にある黄色の「キビタキの記録を送る」ボタンをクリックして、送信フォームからお願いします。

■キビタキ調査 2010年の初認の状況

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kibitaki/10.html

活動報告

鳴き声図鑑

いろいろな種の鳴き声が聞けます！

植田睦之

鳴き声図鑑

鳥の鳴き声を聞くことのできるページが欲しいという希望を、たくさんの方からいただいていたので、この冬からホームページ上にぼくが録音した鳴き声を公開していました。その後、梶本恭子さんや平野敏明さんのご協力もあり、掲載種は充実し、現時点で138種の鳥の声やドラミングを聞くことができるようになりました。色々な鳴き方の声を載せてありますので、野外で聞いた何かわからない声を確認するための参考になるかと思います。ぜひ聞いてみてください。

今後、鳴き声での識別練習用の教材づくりも考えたいと思っています。音源の提供やこの音源を使ったコンテンツのアイデアをお待ちしています。

■バードリサーチ鳴き声図鑑

http://www.bird-research.jp/1_shiryo/nakigoe.html

鳥の録音に適したレコーダー

最近はいろいろな鳥の録音に適したレコーダーが発売され、手軽に録音ができるようになってきました。レコーダーの大きさも、胸ポケットに入るくらいですので、調査や観察の際に持って行って、サッと録ることができます。録音にそれほど興味がなくとも、わからない鳥の声を録って、誰かに聞くこともできます。写真を撮っている人はたくさんいて、せっかく撮ってもそれほど感心してもらえませんが、録音をしている人はまだ少数ですので、手軽にできるわりに感心してもらえます。

会議録音などにつかうICレコーダーでも録音することができますが、マイクの感度が悪かったり、人の声は綺麗に取れても、鳥のさえずりは、綺麗に取れないなどの問題もあります。ちょっと投資して、それなりのレコーダーを買って楽しめます。

ぼくや梶本さんはRolandのR-09という機種(3万円くらい)を使っています。これで鳴き声図鑑に載っているような鳥の声が十分録れます。また、熊本大の三田長久さんお薦めは、SonyのPCM-M10です。最近発売された機種で2万円台で買え、マイク感度もとても良いそうです。

きれいに録音するには

実際に野外で録音しようとした場合に邪魔になるのが、騒音と風です。録音しようとするまで気付かきませんが、上空を通過する飛行機、冷房のファンの音など世の中は騒音に満ちています。こうした音を避け、録音する必要があります。風はウィンドジャマーというポワポワしたもの(写真)を被せば良い音を録ることができます。

皆さんもぜひ録音にチャレンジして、「鳴き声図鑑」になり声が取れたら、お送りください。



写真. R-09とウィンドジャマー。

参考ホームページ

■Roland R-09

<http://www.roland.co.jp/products/jp/R-09/>

■Sony PCM-M10

<http://www.sony.jp/pcm-recorder/products/PCM-M10/index.html>

■松田道生さんのサイト

<http://www.birdcafe.net/howto/howtoall.htm>

図書紹介

海鳥の行動と生態 その海洋生活への適応

綿貫 豊 著／生物研究社 定価3,500円(税別)

海鳥研究入門の決定版とも言える本「海鳥の行動と生態 その海洋生活への適応」が遂に誕生しました。扱っている内容は多岐にわたり、進化と生態、運動機能と生理、海上分布と採食行動、繁殖と適応戦略、海洋環境変化と海鳥に大きく分けられます。本書は、広い角度から海鳥について解説することで、空中と海中を同時に制覇する唯一の生物グループである海鳥の、驚異的な身体能力と機動性を海洋環境と関連付けることを主眼に構成されています。特筆すべきは、専門的な文献が分かりやすく体系立てられて要約・引用されていることで、古典的なものから最新の研究成果まで、600編を超える文献が紹介されています。この本を手にした学生が、自ら文献を探し当てるといった努力をさぼってしまうのではないかと心配されるほどの充

実ぶりです。また、難解な数式が用いられることはなく、どなたにも容易に読みこなせることが心がけられています。コラムでは、より専門的な内容やフィールド調査のこぼれ話も紹介され興味は尽きません。日本初の海鳥研究入門書である本書を手にして、海鳥に興味を持ったり、研究を志す人が少しでも出てくれば素晴らしいですね。

【伊藤元裕 北海道大学大学院 水産科学院】



参加型調査

シロチドリにいったい何が？ 減少の原因を探る最初の一步 守屋年史

砂浜や干潟で、ちょこまかと走りまわって餌をついばむシロチドリは、全国的に観察できるチドリですが、観察される数がずいぶん減っているといわれています。

シロチドリはこんな鳥

チドリ目チドリ科に属するヒバリ大ぐらいのチドリです。背中は淡褐色で、腹部は白く、額から目の上(眉斑)が白色です。足が長いので、立っているような姿勢に見えます。クチバシは短く、大きな目で餌を探していて、干潟にしばらく留まっては、さっと走り出して餌をつまんで捕らえます。

ほぼ全国で繁殖しますが、北方の個体は冬期に南方へ移動してしまうことが多いようです。本来、砂浜や砂州で繁殖することが多いのですが、造成中の埋め立て地などの砂礫地でも繁殖します。巣は、貝殻や小石など集めた簡素な巣を地面につくり3個ほどの卵を産みます。



写真
シロチドリ.

シロチドリの現状

シロチドリの個体数は、1974～85年の調査と2000～03年の調査の間でのカウント数の変化率をもとめた報告では、春期で-75%、秋期で-88%と極端に減少しています(天野

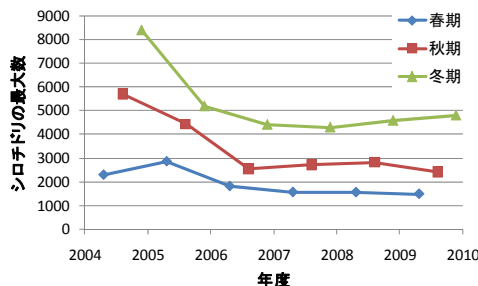


図. 2004年度調査から2009年度調査までのシロチドリの最大渡来数の動向。バードリサーチ(2010)をもとに作図。

2006). また、近年のシロチドリの傾向をモニタリングサイト1000の調査による春期、秋期、冬期調査での最大数の動向でみると、2006年度まで減少しその後にはほぼ横ばい状態が続いており、大きく増加する傾向にはありません(図). 繁殖を終えて、南へ渡っていく秋期にゆるやかに減少しているのも気になるところで、砂浜や砂州などの繁殖地として利用されている場所の状況を反映しているのではないかと考えられます。シロチドリの繁殖地で何が起きているのでしょうか？

アンケート調査を実施します！

このような現状から今回、シロチドリの繁殖の状況を把握するためにアンケート調査を行なうことにしました。繁殖期にシロチドリを目撃した場所や繁殖の状況、個体数、周辺の環境の変化などをご報告ください。過去に遡っての情報も歓迎いたします。詳細は以下のURLにあります。ご協力いただければ幸いです。

■シロチドリ生息調査

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/waterbirds/shigitidori/shiro-chidori.html

引用文献

天野一葉. 2006. 干潟を利用する渡り鳥の現状. 地球環境 11:215-226.
バードリサーチ. 2010. 平成21年度モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査冬期速報. 環境省自然環境局生物多様性センター. 富士吉田.

お知らせ

2010年カレンダー テーマは“群れ”！

今年も来年2011年用のカレンダーを作成することにしました。少し早いですが、カレンダー用の写真を、会員の皆様から募集したいと思ひます。



卓上カレンダーのデザインイメージ.

写真は右記の要綱に沿ってお送りください。

写真が多数集まった場合は、同じ季節の写真の中から、構図や画質などを踏まえて選ばさせていただきます。複数の写真をお送りいただく際は、季節や色合いの異なる写真を選んでいただくと、嬉しいです。ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

● カレンダー用写真の送付要綱

- 送付方法: メールタイトルを「カレンダー用写真送付」として、写真をメールに添付してお送りください
- 写真送付先: 卓上カレンダー 担当 高木憲太郎 (takagi@bird-research.jp)
- 締め切り: 8月31日
- 写真テーマ: 群れ(4羽以上)ただし給餌して集めたものは不可
- 枚数: 1人4枚まで
- 解像度: 縦1200×横1800ピクセル以上
- ファイル名: 撮影年月、種名、撮影した都道府県、撮影者名例)「200905オナガ東京都高木憲太郎.jpg」
- ファイル形式: JPEG
- 選定: バードリサーチのスタッフで選ばさせていただきます
- 特典: 写真を採用させていただいた方には、写真1枚につき、カレンダーを3部を差し上げます

ウミウ 英: Japanese Cormorant 学: *Phalacrocorax capillatus*

1. 分類と形態

分類: ペリカン目 ウ科

全長: 838mm(800-865) 翼長: 315.9±8.9mm (N=7)
 露出嘴峰長: ♂ 69.8±1.3mm (N=12) ♀ 62.0±2.3mm (N=15)
 嘴峰高: ♂ 15.1±0.69mm (N=12) ♀ 13.2±0.62mm (N=15)
 ふ蹠長: 66.9±4.4mm (N=7) 尾長: 150.7±6.9mm (N=6)
 体重: ♂ 3.1±0.18kg (N=42) ♀ 2.5±0.18kg (N=37)
 ※ 露出嘴峰長, 嘴峰高, 体重は天売島の繁殖個体の, 翼長, ふ蹠長, 尾長は北海道浜益の混獲個体の天売海鳥研究所による測定値. 全長は榎本(1941)による.

羽色:

全身黒色で, 目の周囲からのどにかけ黄色い裸出部がある. 繁殖時期には頭部から首, および足の付け根に白い飾り羽をもつ. カワウより一回り大きく, 羽毛は緑光沢がある. カワウは口の周りの裸出部がのどにかけてまっすぐに切れているが, ウミウは三角に切れ込む.



写真1. ウミウ. [Photo by 伊藤元裕]

その年生まれの幼鳥(0歳+)は胸から腹まで白く, 翌年(1歳+)には胸に黒い毛が生え, 2歳+になると胸全体も褐色となるがわずかに白い部分も残る(高野 1982, 十王町一村一文化創造事業推進委員会 2000). 3歳+以上で成鳥羽となる. 胸全体が褐色でわずかに白い部分も残る個体の繁殖例もある(林1996).

鳴き声:

あまり鳴かない. 人間が巣に近づいたときなどは, グアーと鳴く.

2. 分布と生息環境

分布と生息数:

極東地域に分布が限られる. 日本においては, 本州中部以北で繁殖し, 北海道に多い. 大陸では, 朝鮮半島から沿海州で繁殖する. 越冬はやや南に移動し, 日本では沖縄まで分布する. オホーツク海沿岸に5000個体, 千島列島に8000個体, 沿海州沿岸に3000個体, 日本海では1000個体が繁殖するとされる (Siegel-Causey & Litvinenko 1993). 我が国では, 北海道に1000個体, 本州に100個体が繁殖するとされた (Hasegawa 1984)が, その後2000年代には 北海道では3000つがい以上が繁殖し, 増加傾向にある(Osa & Watanuki 2002).

生息環境:

断崖の比較的幅の広い岩棚や, 岩礁, あるいは岩石の急斜面に, おもに集団で営巣する. 沿岸域で採食し, 港の防波堤などで休んでいることが見られる.



写真2. コロニーの環境.

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 一夫一妻. 繁殖期 非繁殖期

繁殖時期:

北海道天売島では平均産卵時期は, 4月初めから5月中旬と年によって大きく変わる. 春先の水温や気温が高いと産卵が早い. 年1回繁殖で, 再産卵することもある. 巣作りを始めてから11.2±5.3日(N=206巣)で産卵する(林1996).

巣:

大きさは径60cmくらい. 巣材はおもに小枝で, 中央部はややくぼんでおり, 海草や枯れ草などを敷くことが多い. 巣の間隔は1mくらい.

卵:

小玉のニワトリ卵サイズでやや俵型. 光沢はなく, 青味がかつた白. 天売島での天売海鳥研究所の調査によると, 卵は重量55.0±3.5g (49.6-59.7, N=7), 長径63.0±2.1mm (59.5-66.2, N=7) 短径39.7±0.8 mm (38.8-41.0, N=7). クラッチサイズは1個から最大では6個, 多くは3~4卵で, 平均3.28±0.79卵(N=749巣)(Kato *et al.* 2001).



写真3. 巣と卵. [Photo by 伊藤元裕]

抱卵・育雛期間・巣立ち率:

天売島では, 抱卵日数は平均27.9±2.1日 (N=16巣)(林1996). オスとメスが, 2時間から数時間交代で卵を抱く. 卵の死亡要因は, 親の放棄117卵, ふ化せず102卵, 捕食や事故76卵(林 1996).

天売島では, ふ化は5月上旬から6月中旬. ヒナは赤裸で産まれる. はじめヒナは親が巣に吐きもどしたものを食べるが, しばらくすると, 親が大きくあけた口に頭を突っ込んで食べるようになる. オス, メス交代で, 採食のために2.2~5.7時間海に出かけ(Kato *et al.* 2001), 持ち帰る餌重量(胃内容物重量)は145±20g (N=23) (Watanuki *et al.* 2004). ヒナの成長速度は92~99 g/日(Kato *et al.* 2001)で, ふ化後50~60日で巣を離れる. 巣を離れた後しばらくは, ヒナは時々巣に戻り給餌をうける(林 1996). 暑い日に親はのど袋に海水を入れてきてヒナにかけることがある. 天売海鳥研究所の調査によるとふ化率は37~95%であり, ふ化したヒナの巣立ち率は46~84%. ヒナの死亡要因は, 親の放棄61羽, 飢餓か病気49羽, 捕食・事故11羽, その他に消失208羽(林 1996).



写真4. ウミウのヒナ. [Photo by 伊藤元裕]

4. 食性と採食行動

食性:

天売島で育雛時期に親やヒナを捕獲した際にはき出した餌や, 首輪法でヒナから採取したヒナへの給餌内容は, イ

カナゴや、アカナゴ、カタクチイワシ、マイワシ、ホッケ、メバル類、カジカ類、カレイ類など(表)。非繁殖期の食物の情報はない。

調査年	1992~1995年		1996~1998年	
	重量比	出現頻度	重量比	出現頻度
イカナゴ幼魚	0~43 %	} 5~29 %		
イカナゴ成魚(1歳以上)	0~67 %			
アカナゴ			0~19 %	
カタクチイワシ	0~61 %		0~32 %	
マイワシ	0~24 %			
ホッケ	0~77 %		23~24 %	
メバル類	0~46 %		3~29 %	
カジカ類	0~29 %		0~14 %	
カレイ類	1~19 %		14~24 %	
ギンポ類			0~5 %	
ウグイ			0~6 %	
イカ類			0~10 %	

出典 Kato et al. 2001 Watanuki et al. 2004

採食行動 :

繁殖期間には、天売島の周辺で、ウトウが下から海面近くまで追い上げてボール状に密集団としたイカナゴ群に横からつつこんで採食するのが観察されている(NHKダーウィンが来た！ 2006)。イカナゴ、カタクチイワシを主に食べる年には集団で採食する傾向がある(Watanuki et al. 2004)。島周りと本土側の20m程度の水深の沿岸で主に採食するが、島と本土の間でも採食する。個体によって好みの採食場所がある。繁殖地から採食場所までの距離は、オスで7~9km、メスで10~13km。個体ごとの採食場所面積は、オスで83~170km²、メスで199~200km²(Ishikawa & Watanuki 2002)。ウミウは浮魚と底魚を両方食べる何でも屋であるが、天売島のウミウは海水温の低い年には、浮魚のイカナゴをよく食べる傾向がある。底魚の主たる採食場所は北海道本土沿岸なので、海水温が高い年には島からの距離が遠く採食のため海に出ている時間が長くなる(Watanuki et al. 2004)。ある程度までは底魚の比率が高くても繁殖成績には影響はないが、底魚の比率が高くなり、そのため、採食時間が長くなって結果的に給餌頻度が減ると、ヒナの成長は悪く、また巣立ち率も低下する(Kato et al. 2001)。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 食べる魚と潜水深度

底魚を主に食べる年には30m程度のほぼ同じ深さまで連続潜水する。浮魚を主に食べる年の潜水深度は10~20mでばらつく(Kato et al. 2001)。オス15.1±3.7 m (N=6) 最大45m、メス7.2±2.4 m (N=7) 最大33mで、オスが深い。潜水時間はオス37±5 秒 (N=6) 最長145秒、メス24±4秒 (N=7) 最長80秒とオスが長い(Watanuki et al. 1996)。

潜水記録計と電波発信機の両方を装着して行動を調べた研究によると、島から20km以上離れた水深40m以下の北海道封土沿岸域や島周りの沿岸域で採食する時、潜水深度は多くの場合20m以上に達し、海底近くで採食しているが、水深が40mを超す場所では潜水深度は10m程度で表層の浮魚を食っていると考えられる(Kato et al. 1998)。

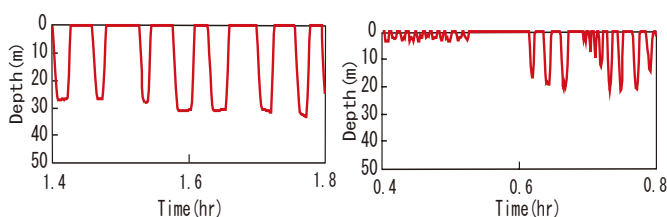


図. ウミウが岸近くの浅い場所で採食した時(左)と、深い場所で採食した時(右)の潜水行動の比較。

● ウミウと鵜飼

鵜飼いは7~8世紀以前からおこなわれている、中国と日本で行われる特殊な漁法である。中国ではカワウをつかった縄につなげない、いわゆる放し鵜なのに対し、カワウとウミウの両者が分布する日本では手縄をつかったつなぎ鵜である。日本では、カワウが使われることもあるが、ウミウの方が大きくて体力がある、のどが太い、おとなしい、等の理由でもっぱらウミウが使われる(十王町一村一文化創造事業推進委員会2000)。犬山、岐阜、京都などの船を使った船鵜飼が有名であるが、鵜匠が川にはいってウをあやつるカチ鵜といわれる漁もある。日立市十王の海岸では、春と秋の渡りの際におもに若鳥を捕獲し、うち体重2.5kgをこす大きな個体が各地の鵜飼いに使われる。

6. 引用・参考文献

Hasegawa, H. 1984. Status and conservation of seabirds in Japan, with special attention to the short-tailed albatross. In: Croxall, JP., Evans, PGH. & Schreiber, RW. (eds), Status and Conservation of the World's Seabirds, ICBP Special Publ No1, pp 487-500.

林英子. 1996. ウミウ(*Phalacrocorax capillatus*)の繁殖生態および繁殖成績に影響を与える要因について. 北海道大学農学研究所修士論文.

Ishikawa, K., & Watanuki, Y. 2002. Sex and individual differences in foraging behavior of Japanese cormorants in years of different prey availability. J. Ethol. 20: 49-54.

十王町一村一文化創造事業推進委員会. 2000. ウミウとの共生. 十王町一村一文化創造事業推進委員会.

Kato, A., Watanuki, Y. & Naito, Y. 1998. Benthic and pelagic foraging of two Japanese Cormorants, determined by simultaneous recording of location and diving activity. J Yamashina Inst Ornithol 30:101-108.

Kato, A., Watanuki, Y., & Naito, Y. 2001. Foraging and breeding performance of Japanese Cormorants in relation to prey. Ecol. Res. 16: 745-758.

NHKダーウィンが来た！. 2006. ダーウィン動画！ウトウ「羽」. <http://www.nhk.or.jp/darwin/darwinmov/index.html>

Osa, Y., & Watanuki, Y. 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. J. Yamashina Inst. Ornithol., 33: 107-141.

Siegel-Causey, D. & Litvinenko, NM. 1993. Status, ecology, and conservation of shags and cormorants of the temperate North Pacific. In: Vermeer, K., Briggs, KT., Morgan, KH. & Siegel-Causey, D. (eds), The Status, Ecology, and Conservation of Marine Birds of the North Pacific, Can Wildl Spec Publ, pp122-130.

高野伸二. 1982. フィールドガイド日本の野鳥. 日本野鳥の会. 東京.

Watanuki, Y., Ishikawa, K., Takahashi, A. & Kato, A. 2004. Foraging behavior of a generalist marine top predator, Japanese Cormorants, in years of demersal vs. epipelagic prey. Marine Biology 145: 427-434.

執筆者

綿貫 豊 北海道大学水産科学研究院 准教授

1959年長野生まれ。1987年北海道大学農学博士。1988年より1993年まで国立極地研究所助手。昭和基地でアデリーペンギンの調査を行う。北海道大学農学研究科をへて現在同大学水産科学研究院准教授。専門:動物の行動生態および海洋生態。



研究誌 Bird Research よい

論文4本受理

今月はたくさんの論文が受理されたので、まとめてご紹介いたします。詳細は、要約や本文をご覧ください。

http://www.bird-research.jp/1_kenkyu/journal_vol06.html

関伸一. 2010. トカラ列島における皆既日食で観察された鳥類の音声行動の変化. Bird Research 6: A1-A11.

関さんの論文は、昨年の日食の時に、鳥の行動がどう変化したのかを示した論文です。ご存知のように日食の日はあいにくの天候で、一番日食がよく見られる予定だったトカラ列島の悪石島では豪雨、関さんが調査した中之島でも雨だったということで「日食観測」とっては残念な状況でした。しかし雨雲があった分、皆既時に照度が低くなったこともあってか、小鳥のさえずりがやみ、リュウキュウコノハズクまで鳴き出したということです。半面、日出日没と比べると急激に明るさが変化するためか、日出日没時とはさえずりの変化に違う点も多かったということでした。



写真. リュウキュウコノハズク.
[Photo by 赤谷加奈]

三田長久. 2010. 熊本県立田山におけるオウチュウカッコウのさえずりの記録. Bird Research 6: S7-S11.

三田さんの論文は、録音記録からオウチュウカッコウの迷行記録を記載したものです。オウチュウカッコウは1988年に長崎での記録があるのですが、きちんとした報告がないため、日本鳥類目録には記載されていません。フィフフィフィという特徴的な声の録音から、この鳥の飛来を記載した論文は、その意味でも重要なものですが、鳴き声の記録を、ソナグラムを見せるだけでなく、実際に聞くことができる点 (<http://www.bird-research.jp/appendix/br06/06s03.wma> で聞くことができます)で、WEBジャーナルのBird Research誌ならではの論文だと思います。今後もこのような音声に基づく論文や、行動をビデオで示した論文などWEBジャーナルの特徴を活かした論文を掲載したいと思いますので、投稿をお待ちしています。



写真.
オウチュウカッコウ.
[Photo by 谷英雄]

嶋田哲郎. 2010. 気象条件にともなうヒシクイの短期的移動. Bird Research 6: S1-S6.

嶋田さんの論文はヒシクイの越冬期間中の個体数変化から越冬期間中の移動を明らかにしたものです。ヒシクイはほかの水鳥と比べ越冬地が限られていて、3地域の越冬地で越冬数のほとんどを占めます。したがってこの3地域での個体数の変化から、群れの移動を追跡できるというのがこの研究のうりです。積雪等の状況によりヒシクイが越冬期間も柔軟に越冬地を変えている可能性が示されています。

植田睦之・堀江玲子・内田博・遠藤孝一. 2010. 巣の分布と植生や土地利用状況をもとにしたオオタカの行動圏の推定手法. Bird Research 6: T1-T9.

植田ほかのオオタカの論文は、目視ではなかなか明らかにすることの難しいオオタカの行動圏を巣の分布や植生情報を基に推定しようというものです。ここ数十年、ラジオテレメトリー法によるオオタカの行動圏調査が数多く行なわれ、実際の行動圏が明らかにされています。そこで、それらの研究により明らかになった知見をもとに推定手法を検討し、ラジオテレメトリー調査の結果で検証を行ないました。その推定手法は行動圏は巣の分布をもとにその中心線で区切っていくボロノイ分割という方法などもちいて推定し、そこに含まれる採食地(林縁に接した農耕地などの開けた環境)の分布をもとに重要な採食地を推定するというものです。少なくとも関東地方の3地域では、この方法で精度高く行動圏および重要な採食地の推定が可能だということがわかりました。この手法は近々改訂される「猛禽類の保護の進め方」にも採用される予定です。今後、アセスなどで使われていくのではないかと思います。



写真. 発信機を装着したオオタカ.
[Photo by 内田博]

ご投稿お待ちしております!

みなさんもおもしろい観察や貴重なデータをお持ちではないでしょうか? そのような情報をBird Researchへぜひ投稿ください。論文を書くのは、それほど難しいことではありません。ご相談いただければお手伝いもしますので、投稿および執筆のための相談、お待ちしております。

【植田睦之】

バードリサーチニュース 2010年6月号 Vol.7 No.6

2010年6月24日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎

表紙の写真: スズメ